

市民病院だより

子宮頸がん検診について

産婦人科 萩尾 洋介

子宮頸がんは20〜30代の女性に増えている

子宮頸がんは、ごくありふれたウイルスによる感染が原因です。子宮頸がんのほとんどは、性交渉によって子宮の入り口（頸部）の細胞に、ヒトパピローマウイルス（HPV）が感染することによって起こります。性交渉の経験のある女性なら、誰でも子宮頸がんになる可能性があります。最近では20〜30代の女性に急増しています。この年代は、結婚年齢の高齢化とも重なり合い、妊孕性（妊娠できる機能）に大きな影響を与えます。

正常な細胞が子宮頸がんになるまで

たとえHPVに感染しても、多くの人は自分の免疫力でウイ

ルスを排除できます。ところが、約10%の人がウイルスを排除できずに感染が持続し、一部の人で細胞に変化を起こします。この状態を「異形成」といい、がんになる前の病変（前がん病変）です。

通常、異形成からがんになるまでは、5年から10年の年月がかかるかとされています。もっとも、異形成になれば、すべてがんに進展するのではなく、軽度異形成から上皮内がんに進行するのは5〜10%と報告されています。例えば、風邪のウイルス感染者がすべて重篤な肺炎を引き起こすのではなく、多くは軽い風邪症状で治っていくのと同じで、それほど恐れることはありません。

子宮頸がんは検診で予防できる

異形成は長い期間を経て子宮

頸がんに行進するので、定期的な検診によってがんは予防できます。子宮頸がんの初期の段階では、自覚症状はほとんどありません。そのため、定期検診が予防の役割を果たします。

一般的に、子宮頸がん検診では細胞を顕微鏡で調べる「細胞診」という検査が行われます。細胞診は、子宮の入り口部分の表面を小さなブラシでこすり取って細胞を採取し、「がん細胞があるか否か」を調べます。正常な細胞に比べ異形成やがん細胞は形が異なるので発見できます。

子宮頸がん予防ワクチン

子宮頸がん予防ワクチンは平成25年に定期接種化されました。その後、副反応に関してさまざまな報道や見解が発表され、現在、接種を積極的に勧めることは一時中止されています。

しかし、世界の多くの国では予防ワクチンが実施され、有効性が示されています。国内では、現在専門家チームによる調査が開始され、ワクチン接種後に生

じた症状や健康被害に対する診療体制の確立や救済などの対策が講じられています。専門家会議では「日本で問題になっていない」とし、世界保健機構（WHO）は「若い女性たちは、本来予防可能であるHPV関連がんの危険にさらされたままになっている」として接種を強く推奨しています。

できるだけ早く副反応の問題が解決されて、安心して子宮頸がん予防ワクチン接種ができるようになることが望まれます。



時間外受診について

急病などでの時間外受診の場合は、必ず電話で宿日直医師の担当診療科をお問い合わせください。専門外の疾病の場合は、診察できない場合がございますのでご了承ください。

【問合せ】小城市民病院 ☎ 73・2161 ホームページ・アドレス <http://www.city.ogi.lg.jp/hospital/>